

演習授業での「聞き書きマップ」の活用 —子どもの安全に向けた一実践例— 松原英世（甲南大学）

1. はじめに

本稿では、子どもの安全に向けた一実践例として、わたしが甲南大学法学部で行っている講義を紹介したいと思います1)。

まず、わたしの専門について、簡単に説明しておきましょう。わたしの専門は、刑事法学、なかでも、刑事政策学を中心に研究しており、大学ではもっぱら、刑事施策、犯罪学の講義を担当しています。

刑事政策学は、ざっくりいえば、犯罪対策のあり方を研究するものです。その関係で、対策の対象である犯罪現象を理解・説明しようとする犯罪学についても研究しています。刑事政策学が、どちらかといえば、起こってしまった事態（犯罪）への対処を検討するのに対して、犯罪学は、望ましくない事態（犯罪）が起こらないようにすることを考えます。後述するように、こうした犯罪学の視点は、子どもの安全に向けた取り組みに応用することができます。

2. 講義の内容

本稿で紹介する講義は、1年生の必修科目である基礎演習です2)。

基礎演習は、大学教育で最低限必要となるスキルを身につけさせるとともに、法学を学ぶうえでの基礎的な知識を習得させることを主たる目的としています。わたしは、後者については、基礎的な知識を習得させるよりも、法学を勉強するモチベーションを持たせることのほうが大事なのではないかと思ひ、法学部ではあまり扱われない子どもの安全を取りあげています。

その内容はシラバスのとおりです3)。

3. 環境犯罪学

前提となる知識を獲得するために、学生には、まず、[小宮信夫(2015)『子どもは「この場所」で襲われる』小学館]を読んでもらいます。本書は、環境犯罪学の視点から、子どもの犯罪被害をいかに防ぐかについて、具体例を用いて分かりやすく、かつ、詳細に論じています4)。

(基礎演習のシラバス)

授業概要	本を読み、そこで得た知識を使って調査し、その成果を報告する。
到達目標	(1) 科目における到達目標 大学での学びへの導入として、資料の読み方、調査の仕方、プレゼンの仕方等を身につける。 (2) カリキュラム・マップにおける到達目標 A. 法学・政治学を学ぶ上で必要な知識や考え方を修得し、法学・政治学の全体像を把握する。 B. 法学・政治学の基礎知識や理論を修得する。 C. 実践的かつ実務的な学修を行い、法曹等の専門職をはじめ、社会の中で実践的に活用できる能力を培う。 D. 多様な視点から物事を捉える能力を涵養するために、国際的な知識を身につけ、法学・政治学に隣接する学問の知識や理論を修得する。 E. 問題を自ら発見し、情報を収集・分析して論理的思考に基づいて問題を解決に導く能力を身につける。 F. 社会人に必要な情報処理、コミュニケーション、プレゼンテーションのためのスキルや能力を身につける。
授業方法	演習形式で行う(対面のみ)。詳細は「授業構成」のとおりである。
アクティブ・ラーニングの内容	課題解決学習/体験学習/調査学習/グループディスカッション/グループワーク/実習、フィールドワーク
準備学習	次の授業までしておくべきことを適宜指示する。なお、1回の講義につき1時間半程度の予習・復習が必要となる。
必要となる知識	特になし。
授業構成	1. 共通講義 2. 共通講義 3. 図書館ガイダンス (04/25: オンデマンド) 4. オリエンテーション (自己紹介、班分け、ガイダンス) 5. 前課となる知識の獲得 (小宮 (2015) 1章、2章) 6. 前課となる知識の獲得 (小宮 (2015) 3章、4章) 7. 前課となる知識の獲得 (小宮 (2015) 5章&講義) 8. 法学会総会 (05/30) 9. フィールドワーク&グループワーク 10. フィールドワーク&グループワーク 11. フィールドワーク&グループワーク 12. 成果報告 (1班、2班) 13. 成果報告 (3班、4班) 14. 成果報告 (5班) 15. まとめ ※ 「図書館ガイダンス」、「法学会総会」の実施日は変更される可能性がある。
実務経験のある教員又は実地的教育による授業科目	該当しない
定期試験	実施しない
成績評価	受講態度、課題への取り組み、成果報告の内容で評価する。 なお、課題については、成果報告のさいに口頭にてフィードバックをおこなう。
教科書	小宮信夫 (2015) 『子どもは「この場所」で襲われる』小学館 (教科書を購入する必要はありません。)
参考書・資料	適宜案内する。

環境犯罪学は、伝統的、かつ、中心的な犯罪学とは異なって、犯罪がまさに発生する環境（場所/状況）に注目し、それによって犯罪の発生を説明しようとする理論です。従来の犯罪学が、行為者に注目し、「なぜそういうことをするのか？」との問いに答えようとしていたのに対して、環境犯罪学は、行為環境へとその関心を移し、「なぜそういうことが起こるのか」との問いに答えようとするわけです。その主張は、「犯罪を遂行する機会がなければ（犯罪をしようと思っている人がいたとしても）犯罪は起こりえない」というもので、それゆえ、犯罪機会論と呼ばれたりもします。したがって、そこから導かれる対策は、客観的な状況を変えることで犯罪の機会を減らす（そうすることで犯罪を防ぐ）というものになります。

その詳細は、[拙稿 (2021) 「地域で考える子どもの安全：そのための視点と方法（犯罪学の知見を活用して）」子ども安全研究6号 34-39頁]にゆづりますが、たとえば、写真の公園のように、子どもが遊ぶエリアをフェンスで囲っておけば、そこに関係のない大人（不審者）が入ってくれば目だつわけで（だから入ってこない）、こうして環境犯罪学は、子どもへの加害を企ん

でいる大人と子どもとの接触の機会をつぶすことで、子どもへの犯罪を防ごうとするわけです5)。



また、図①のような公園については、図②のように（悪いことをしようとしている人にとって格好の）目隠しとなっている木を取り払うことで（そうすれば、道路を歩く人の視線が子どもたちの見守りとなる）、さらには、公園の前の道幅を狭くする、あるいは／かつ、バンプを設置することで作られた視線によって（道幅が狭くなる／バンプがあることでそこを走る車はスピードを落とさざるをえず、それは悪いことをしようとする人にとっては見られているかもと気になるものなので）、子どもを見守ろうとする（そうして子どもへの犯罪を防ぐ）わけです。

すなわち、客観的な状況を変えることで、犯罪の機会を減らそうというわけですが、こうした視点は、いうまでもなく、(子どもの) 事故の機会についても応用可能です。

4. 聞き書きマップ

犯罪や事故の機会を減らすためには、その前提として、どういう場所や状況が危険なのかを知る必要があります。私たちはどうやってそれを知ることができるのでしょうか。そのためのツールが「地域安全マップ」です。それは、私たち自らが、そしてなによりも、子どもたち自身が危険な場所、すなわち、犯罪（や事故）に遭いそうな場所を知るための、そしてさらに重要なことは、そうした場所を発見／察知することが「できる」ようになるためのツールです6)。



(図①)



(図②)

「地域安全マップ」は、自ら地図を作成する、すなわち、そこに手書きで書き込んでいくというアナログなものでした。そうしたところ、パソコン等を使ってより簡単に「地域安全マップ」を作成できる画期的なツールが開発されました。立正大学の原田豊先生による「聞き書きマップ」です。その使い方は、[原田豊編著（2017）『「聞き書きマップ」で子どもを守る：科学が支える子どもの被害防止入門』現代人文社]にお任せして7)、ここではごく簡単にその内容を説明したいと思います。

「聞き書きマップ」は、GPS 受信機、IC レコーダー、デジタルカメラという3つの道具を使って、リアルタイムに地図を作成していきます。すなわち、現場を歩きながら、その場その場で気づいたことを音声で録音し、かつ、写真にとどめていきます。しかもその経路は、GPS 受信機のおかげで地図データのかたちで保存されます。さらに画期的なことは、経路中のどこで録音したか、どこで撮影したかが地図データとリンクされているということです。したがって、いつ・どこを歩いて、現地の状態がどうだったのかをパソコンを使って簡単に再現することができます。

3つの道具を使ってということでしたが、これらはいずれもスマートフォンに内蔵されています。そういう次第で、スマートフォン用のアプリも開発され、そ

れをインストールすれば、スマートフォンで簡単に「聞き書きマップ」を作成できるようになりました8)。

(学生が作成した「聞き書きマップ」の一部)



5. 学生によるフィールドワークの成果

先のシラバスにあるように、基礎演習では、フィールドワークとして、学生に実際に「聞き書きマップ」を作成してもらい、その成果をプレゼンしてもらいました。そして、講義終了後に、次のような課題を出しました(テキスト『子どもは「この場所」で襲われる』を読み「聞き書きマップ」を作成したことについて、その「感想(そうした経験をとおして感じたこと、新たに得た知見等)」を800字程度でまとめてください。)

以下に学生の感想を抜粋しておきます。

▽ 危険は人で判断するのではなく、場所で判断すること、「見えにくく、入りやすい」場所を避けることが重要であることが分かった。

▽ フィールドワークをしていく中で、一番感じたことは、普段はこのような場所(見えにくく、入りやすい場所)を見ても何とも思っていなかったことです。

▽ 「聞き書きマップ」を制作する際、実際に甲南大学周辺を歩き、危険な場所を探しに行ったが、普段はそのようなことを意識して町を歩いたことがなかったため、いつもとは見える景色がとても違った。

▽ この経験をとおして感じたことは、危険箇所は様々な場所に存在しており、大学生の視点と幼児の視点とでは違いが多いことだ。

▽ 地域安全マップを作る過程は机に向かって説明を聞いているだけよりも、記憶に残りやすく効果的だと思った。

▽ 私は安全・犯罪対策の教育を見直すべきだと感じた。…〈中略〉…「なぜ守らないといけないのか？」や「なぜ危険なのか？」ということが分かっていない子どもがほとんどだろう。…〈中略〉…実際に危険な場所に行って説明することは、いい経験となって教育効果が高いのではないだろうか。

▽ 犯罪機会論の知識があると、歩きなれた場所や初めて行く場所でも危険を避けることができる。どの世代の地域住民でも取り組むことができ、誰でも実践できるので活用しやすいと思った。

▽ 普段何気なく歩いている大学周辺を調査した。すると、普段は何も思わない道だが、目線を変えるとどんどん危険場所が出てきた。街灯が少なすぎる道や、日中は店で賑わう商店街も暗くなるにつれて人通りが少なくなり、危険な場所と変わった。このように目線や見方など変えることで、こんなにも身近に危険は潜んでいるんだと改めて知ることができた。実際に街中を歩くことで、調べるよりも頭に入りやすく、体験することが大事なんだと感じた。

▽ 整備されている公園が多いため、腐敗した遊具はないものの、安全性についてはあまり考えられていなかった。例えば、高さのある遊具の地面にマットや人工芝を敷いていないため、落下したさいに大怪我に繋がってしまう恐れがある。また、私自身が園児や児童の頃にも行っていたような、本来の用途とは異なった危険な遊具の使い方を、フィールドワーク中に度々見かけた。

▽ この本を読むまでは実際に私も犯罪原因論が正しく、犯罪を犯す者の思考がおかしいのだと考えていた。しかし、この本を読んでからは、犯罪は、起りやすい場所で起こるべくして起こってしまっているのだと感じました。

6. おわりに

学生の感想からは、子どもの安全対策についてなにかしらの（有意義な）気づきがあったことがうかがえます。わたしは大学に勤めていますので、大学生を対象にこのような講義をしています。が、「聞き書きマップ」はとても簡単に作成できますので、機会があれば、小学生や高齢者等さまざまな世代を対象に同様の取組みをしていただければと思います。

また、「聞き書きマップ」は防犯や事故予防だけでなく、防災マップの作成、介護への活用、旅の記録等、それ以外のものにも広く応用可能です。想像力を働かせて、いろいろとご活用いただけるとうれしいです。

1) 本稿は、2023年9月30日に東京工業大学で開催された、日本子ども安全学会第10回大会での報告に基づいています。

2) 2023年度は17名が受講しました。

3) 2023年度は第10回目に、ゲストスピーカーとして吉川優子さんに来ていただきました。

4) 他に環境犯罪学についての優れた入門書として、[谷岡一郎 (2004) 『こうすれば犯罪は防げる：環境犯罪学入門』新潮社]があります。

5) こうしたフェンスもなく、たとえば、遊具の近くにベンチがあれば、子どもへの加害を企んでいる大人はそこに座って、子どもとの接触の機会をうかがうことができます。

6) これについても、詳細は、前掲・拙稿を参照してください。また、『地域安全マップ』の実際の作成方法については、簡単なものとして、前掲・小宮 97-100 頁、より詳しいものとして、次のサイト (https://www.bouhan.metro.tokyo.lg.jp/anzen_map/book75/book75.pdf) を参照してください。

7) 併せて、原田先生が運営する次のサイト (http://www.skre.jp/nc2/index.php?key=jo46ph41v-15#_15) もご覧ください。

8) なお、本アプリは、アップル版は App Store から、Android 版は Google Play ストアからダウンロードできます。また、そのマニュアルは、前述のサイトからダウンロードできます。